様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ２５ 日現在

機関番号：３２６８５
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２５２０２０３

研究課題名（和文）南北朝期から江戸初期における書物の移動に関する基礎的研究

研究課題名（英文）Fundamentaral study on transfer of books from Nanbokucho preiod to earily Edo preid

研究代表者
前田　雅之（Maeda, Masayuki）

明星大学・人文学部・教授

研究者番号：００２０９３８９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円、（間接経費）　　720,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の本来の目的は、南北朝から江戸初期の書物の移動データベースの構築にあったが、『実隆公記』のデータ量が多すぎ、それに対する人員も不足したため、やむなく『実隆公記』（16世紀分）を中心とした書物の移動・伝授講義編（約3500例）のデータベースを完成し、2013年3月に冊子版として研究成果報告書として刊行した。とはいえ、これによって、16世紀の室町期の書物の移動と書物をめぐる講義・伝授はほぼ理解可能となったと思われる。

研究成果の概要（英文）：The primary purpose of this study was the building of transfer of books database from Nanbokucho preid to earily Edo preid. But,quantity of database on "Sanetaka koki(16th century)" was too large. So,we finished the building of transfer of books database on "Sanetaka koki"and so on.The database is classified in transfer of books and initiation-lecture of books.And the report was published on March 2014.
We can understand the actual condition on books(transfer/initiation/leture...)in 16th century in japan.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：書物の移動　古典　献上・進上　下賜

１．研究開始当初の背景

本研究は、平成１８年度～２０年度に行われた「室町期における下賜・献上・進上本の基礎的研究」（課題番号 18320042、基盤研究（Ｂ））の成果を受けて、それをより発展させようとしたものである。

２．研究の目的

研究の目的は、南北朝が始まる建武三年＝延元元年（1336）から大坂夏の陣が終熄し、徳川体制が完成する元和元年（1615）までの約 280 年間における書物の移動データベースを作成することにある。研究の目的は、南北朝が始まる建武三年＝延元元年（1336）から大坂夏の陣が終熄し、徳川体制が完成する元和元年（1615）までの約 280 年間における書物の移動データベースを作成することにある。

３．研究の方法

①　、データベース構築

本研究の中心的作業である。代表者および研究協力者の渡瀬淳子を中心として、他の研究協力者（内田澪子・松本麻子・高津希和子・松本大・大坪舞）と共に、『実隆公記』の 16 世紀分の「書物の移動」・「書物の伝授・講義」のデータ（約 3500 件）を規定のマニュアルで採り、その後、代表者・渡瀬・大坪で毎年夏と春にチェック作業を行い、完成させた（冊子版、報告書参照）。

②　、文庫調査

本研究の第二の目的は、大名文庫にある蔵書を実見し、奥書などから当該書物の移動状況を確認する作業である。4 年間の間に、島原松平文庫・祐徳稲荷中川文庫・宮城県図書館伊達文庫・熊本大学附属図書館寄託永青文庫を調査した。但し、今回の報告書では、奥書などは省いている。正確さを期した結果である。

③　、研究会

年に 2～3 回、前田の研究室を使って、研究会を開催した。内容は、データベース構築の進捗状況報告、『花鳥余情』輪読、研究発表である。本研究会で発表し、学会発表に繋がったものも多い。

４．研究成果

「研究の目的」でも述べたように、データベースの範囲は、当初の目的では「建武三年＝延元元年（1336）から大坂夏の陣が終熄し、徳川体制が完成する元和元年（1615）までの約 280 年間」であった。

だが、いかんせん、『実隆公記』のデータが量的にあまりに多かったこと（約 3500）、次いで、データ量に対して採集要員の数（7 名）が不足していたこと、さらに、採集されたデータの検証作業（チェック要員３名）に、上記の一覧に掲げたごとく、かなりの作業時間と手間を要したといった種々の理由のため、まことに残念かつ遺憾なことでありながら、完成したデータベース（冊子版）としては、「『実隆公記』を中心とする書物の移動データベース」にならざるを得なかった。これについては、見通しの甘さを痛感している。

とはいえ、データベース構築作業を行う過程において、今後大きな問題にふくらむ可能性がある問題群が出現したことについては、ここで触れておかねばならないだろう。それは、以後継続されるデータベース構築作業は言うまでもなく、室町期～江戸初期における古典的公共圏解明のためにも活かされる問題になることは確信している。

第一に、三条西実隆という人物が彼の生きた時代の文化の中心的存在として機能しているということの意味合いである。むろん、この問題については、古くは、原勝郎『東山時代における一縉紳の生活』（『芸文』、１９１７年）や芳賀幸四郎『東山文化の研究』（河出書房、１９４５年）・『三条西実隆』（人物叢書、１９６０年）、最近では、宮川葉子『三条西実隆と古典学』（風間書房、１９９５年）でも縷々論じられているけれども、実際の書物の移動の面から、改めて実隆のいわゆる文化活動を見ていくと、新たな視点が開かれてくる。書物が誰から実隆に、実隆から誰かに、誰かが実隆を介して第三者に、などといった書物移動の多様な方向性の中で実隆を改めて位置づけることが可能となる。この多様な方向性の多層的な世界こそが実隆を中心とした交流圏ないしは親密圏と言ってよいだろう。

そこで、実隆の具体的な交流圏を見ていくと、実隆と書物のやりとりをしているのは、天皇・親王・伏見宮といった皇族から始まり、摂関家、清華家、大臣家、羽林家、名家、半家といった貴族の諸階層、加えて、将軍家、管領、守護、地方の武将といった武家・武士、五山僧・顕密僧などの僧侶群、貴族や武家の女房や夫人たち、最後には、実隆と管領・守護・地方武将等を媒介する宗祇・宗長をはじめとする連歌師がいることが分かる。その他、装幀等で実隆亭に出入りする経師といった職人たちもその圏域に入ってくるだろう。要するに、室町期において書かれた物（書物・短冊・色紙・銘など）に関わる主要な身分・階層との交流がここから諒解されるのである。

そのような人たちと実隆はどのような書物をやりとりしているか、これらを具体的に観察することによって、書物のジャンル・区分と交流関係との関係のありようが明らかになり、そこから、単に書物の移動の問題ではなく、書物と人間および組織・所属集団の関係のありようを問うことが可能となるだろう。そういった様々な人間および組織・集団の関係構図のなかに実隆という人間は社会的に位置しているのであり、実隆の文化

活動とは、様々な人間および組織との関係性の中で、役割を適宜かつ随時に変えながら、彼らの期待に答えるものであったと思われる。それを文化活動と呼ぶか、他方、経済活動と呼ぶかは、仕事の内容に拠るだろうが、実隆にあっては、一続きのものであったはずである。そうした書物をめぐる活動の総体こそ、実隆固有のありようと言ってよいものであった。そうした実隆の活動の全体像、即ち、総体を見ることによって実隆の立ち位置を明らかにすることが、室町期における書物をめぐる文化論および古典的公共圏の具体的ありようと直結することは言を俟たないだろう。

第二に、上記の問題とも関連するが、『実隆公記』に現れる移動する書物群のもつ問題である。国文学という学問を研究する人間は、往々にして、国文学で対象とする書物群しか見ないが、こうした視点で『実隆公記』を見た場合、それは内包する豊饒な世界のごく一部を垣間見たに過ぎないだろう。実隆が扱った（書写・見る・遣わす・貸借する・下賜される・進上する・沽却する）書物は、データベースを見れば、一目瞭然するように実にと言うか、あまりに多様である。『古今集』・『伊勢物語』・『源氏物語』といった典型的な古典・古典的書物は書物の中心とは言えるものの、全体から見れば、ほんの一部に過ぎない。扱った書物群は、仏書・漢籍・有職故実・歌論書・連歌書・同時代和歌・連歌から色紙・勧進帳などに及ぶものである。言い換えれば、当時、世間に出回っていた書物のかなりの部分を占めるものとなるだろう。公家ならびに武家・武士の目に触れ、教養・知識の基盤となった書物群がこれらのものであるに違いない。それは、近代的な学問的区分によって分割されていない書物群であるとも言える。こうした書物群とそれを扱った人たちの関係性を見れば、自ずと当時の社会のありよう、知と教養のありようが浮かび上がってくるだろう。

とまれ、「『実隆公記』を中心とする書物の移動のデータベース」から読み取れるものは、簡潔に言えば、室町における知の動きの総体である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

<u>前田雅之</u>

〔雑誌論文〕（計　10　件）

１，明星本『正広自歌合』の本文と校異（１）（明星大学研究紀要、人文学部、日本文化学科 22、2014 年 3 月、27～197 頁）

２，僧侶の恋歌（３）勅撰集（下・１）題詠のもたらしたもの（１）顕密僧と野僧（歌僧）の詠作から（明星大学研究紀要、人文学部・日本文化学部２０、２０１２年、１５～３９頁）

３，ゴシップの公共圏（アジア遊学１５５、９５～１０６頁）

４，『花鳥余情』―兼良の源氏学―リアリティーを担保する可視的存在（拙編『中世の学芸と古典注釈』、４９６～５２７頁）

５，唐物としての黄山谷（アジア遊学１４７、２０１１年１１月、１１４～１３２頁）

６，和歌は〈公共圏〉を生み出す―室町期武家の和歌詠作から（錦仁・阿部泰郎編『聖なる声』、２０１１年5月、５７～９２頁）

７，僧侶の恋歌（２）勅撰集編（中）八代集（『後拾遺集』～『詞花集』）所収歌の表現分析（明星大学研究紀要　人文学部・日本文化学科１９）、２０１１年、１～１８頁

８，反動的な古典との出会い方のすすめ（日本文学５９－４、２０１０年4月、２～１５頁）

９，古典的公共圏と他者（物語研究１０、２０１０年3月、１１１～１２９頁）

10，僧侶の恋歌（１）勅撰集（上）（明星大学研究紀要　日本文化学部・言語文化学科１８、２０１０年、２３～５０頁）

研究協力者

内田澪子

１，「北叟」と「塞翁」（アジア遊学１５５、２７～３３）・浅見和彦・伊東玉美・内田澪子・蔦尾和宏・松本麻子編『古事談抄全釈』（笠間書院、２０１０年3月、５１６頁）

２，『十訓抄』序文再読（日本文学６１－７、２０１２年7月、４４～５４頁）

３，『古事談抄』書写時期について（国語国文８０、２０１１年8月、３５～５２頁）

４，穂久邇文庫蔵『古事談抄』（影印）（上記『古事談抄全釈』）

松本麻子

１，宗養の付句（日本文学６２－１、２０１３年1月、２５～３４頁）

２，歌連歌と連歌歌―正徹の和歌を軸に―（中世文学５８、２０１３年、６４～７３頁）

３，褻の和歌と「俳諧」―『再昌草』の贈答歌を読む（アジア遊学１５５）

４，『名所句集』の研究―連歌師の学芸と注釈について（『中世の学芸と古典注釈』、１５０～１７８頁）

５，連歌文芸の展開（風間書房、２０１１年6月、６６７頁）

６，浅見和彦・伊東玉美・内田澪子・蔦尾和宏・松本麻子編『古事談抄全釈』

７，連歌「古注」の変遷（文学１２－４、２０１１年7月、１２９～１４２頁）

８，地下連歌師の和歌的表現―『新古今和歌集』の影響を軸に―（成蹊國文４３、２０１０年3月、５７～６５頁）

９，宋砌・心敬・専順と連歌歌合（青山語文４０、２０１０年3月、２６～４０頁）

岡崎真紀子
１,『発心和歌集』の詠歌と享受（叙説４０、２０１３年1月、１４７～１６１頁）
２，岡崎真紀子・千本英史・土方洋一・前田雅之編『高校生からの古典読本』（２０１２年１１月）
３，中世歌学における言語意識―仙覚『万葉集註釈』をめぐって（『中世の学芸と古典注釈』、２０１１年9月、２６１～２８６頁）
４，歌ことば「鴫の羽がき」（『鳥獣虫魚の文学史』、日本古典の自然観２　鳥の巻、２０１１年8月、１７９～１９５頁）
５，源俊頼と連歌と和歌（文学１２－４、２０１１年7月、７０～８５頁）
６，覚如の歌、円空の歌（『聖なる声』、２０１１年5月、１５６～１７６頁）

渡瀬淳子
１,「ぼろ家」の定型句―「松の柱」のある景色―（日本文学６２－７、２０１３年7月、２７～３６頁）
２，林逋の詩と梅の歌―室町時代の詠梅歌の変化と宋詩（中世文学５８、２０１３年、７４～８２頁）
３，諸仏念衆生、衆生不念仏―中世「擬」仏教語の一側面―（国語と国文学８９－８、２　０１２年8月、５２～６７頁）
４，楊貴妃の双六―幸若「和田酒盛」の世界―（アジア遊学１５５、２０１２年7月、４８～５９頁）
５，韓憑故事の受容と変容（『中世の学芸と古典注釈』、１７９～１９８頁）
６，仮名本『曽我物語』をどう読むか―流布系本文と連想機能（武蔵野文学５８、２０１０年１２月、２１～２６頁）

原　克昭
１, 中世日本紀論考―註釈の思想史（法蔵館、２０１２年5月、４７０頁）

高津希和子
１,「狐眉記」試論―大江匡房の「狐眉」受容（国語国文８２－４、２０１３年4月、３７～５２頁）
２，項目執筆（浅見和彦・伊東玉美・内田澪子・蔦尾和宏・松本麻子編『古事談抄全釈』、笠間書院、２０１０年3月、５１６頁）

松本　大
１,『湖月抄』の注記編集方法―『岷江入楚』利用と『河海抄』引用について（詞林５４、２０１３年１０月、２１～４０頁）
２,『河海抄』巻九論―諸本系統の検討と注記増補の特徴（中古文学９１、２０１３年5月、６７～８１頁）
３,『花鳥余情』『伊勢物語愚見抄』の後人詠注記―歌学から物語注釈への一過程（詞林５２、２０１２年１０月、３９～６２頁）
４,『河海抄』における歌学書引用の実態と方法―顕昭の歌学を中心に（詞林５０、２０１１年１０月、１４～２９頁）
５，河内方の源氏学と『河海抄』―内閣文庫蔵十冊本『紫明抄』巻六巻末の『水源抄』抜き書き群をめぐって（『中世の学芸と古典注釈』、４７５～４９５頁）
６,『河海抄』における『紫明抄』引用の実態―引用本文の系統特定と注記の受容方法について（語文・大阪大学９６、２０１１年6月、３１～４３頁）
７,『河海抄』の後撰集引用の実態（学芸古典文学３、２０１０年3月、９５～１０２）

大坪　舞
１，戦国期における鷹の伝授―西園寺家・持明院家の鷹書から（芸能史研究２０１、２０１３年4月、１～１４頁）
２，伝二条良基作「鷹書」瞥見―付・岩国徴古館蔵『鷹百首和歌』翻刻（平安文学研究、衣笠編４、２０１３年3月、２９～５８頁）
３，持明院基春による鷹書編纂―『責鷹似鳩拙抄』と持明院家旧蔵書の比較を通して（立命館大学６３０、２０１３年3月、６５９～６６８頁）
４，近世における持明院家関連鷹書群の形成と伝来―『持明院家鷹十巻書』の考察を通じて（古典遺産６２、２０１３年1月、５６～７９頁）
５，鷹書における恋と女の秘伝―「女郎花物語」を端緒として（アジア遊学１５５、２０１２年7月、７６～８９頁）
６，鷹書説話と和歌・講釈―近衛前久『龍山公鷹百首』を中心として（説話文学研究４７、２０１２年7月、１８５～１９７頁）
７，交野の御狩―御鷹飼・鳥柴を中心として（平安文学研究、衣笠編３、２０１１年9月、４８～５７頁）
８，中世初期の京都今宮祭に関する一考察―祭礼行列の渡物と疫病対策的性格に着目して（本多健一と共著、アート・リサーチ１０、２０１０年3月、５０～４１頁）

〔学会発表〕（計　３　件）
前田雅之
１,『正広自歌合』の本文形成と伝本の様態　和歌文学会12月例会　2013年12月21日（於白百合女子大学）
２，古典的公共圏の成立時期をめぐって―権力（院政・武家）・勅撰集の編纂・古典注釈を中心に―　　中古文学会秋季大会　2012年11月4日（於大阪大谷大学）
３，室町文化と説話　説話文学会九月例会　2011年10月1日（於明星大学）（司会を務める。講師は、恋田知子・堀川貴司・松本麻子）

〔図書〕（計　４件）
前田雅之
１，岡崎真紀子・千本英史・土方洋一・前田編『高校生からの古典読本』（平凡社ライ

ブラリー、２０１２年１１月、３９０頁）
２，前田雅之編『もう一つの古典知』（アジア遊学１５５、２０１２年7月）
３，前田雅之編『中世の学芸と古典注釈』（竹林舎、２０１１年9月、６２９頁）
４，古典的思考（笠間書院、２０１１年６月、３９５頁）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
前田雅之（まえだ・まさゆき　）
明星大学・人文学部・教授
研究者番号：00209389

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：